

〔研究ノート〕

二つの「幸福」なる文学にみる多元社会ケベックの変貌 ——「二つの孤独」からトランスミグランスへ——

真 田 桂 子

二十一世紀を迎え、独自の多元社会を形成するケベックは、絶え間ない共存の模索を続けながら、新たな局面に直面していると言えるだろう。現代ケベック文学においてとりわけ注目されるのは、トランスカルチュラリズムが浸透したモンリオールにおいて、新世代文学や「トランスミグランス」と呼ばれる新たなコスモポリタニズムがぎざしていることである。

この小論では、ケベック社会が経た変貌と新しい動きを省察するために、この地で約半世紀を隔てて発表された「幸福」をタイトルに掲げた二つの小説を取り上げる。二つの小説のうちの一つは、1945年に発表されたガブリエル・ロワの『かりそめの幸福』である。この作品は、モンリオールを舞台とし、急激な近代化と第二次世界大戦前後の不穏な空気に包まれていく都市のなかで、当時はまだ第二級市民とみなされていたフランス系住民が、段々と疎外されていく姿を描いた社会派の小説で、発表当時センセーショナルな成功をおさめ、ケベック文学に一時代を画した。もう一方はその約半世紀後の1998年に発表された小説で、レバノンに生まれケベックに移住したアブラ・ファルドによる『すり抜けし幸福』である。この作品は、抑圧された立場にあり沈黙の中にかき消されていた移民女性の声をひろいあげ、その回想を中心に、ケベックに移住した一家の命運と苦難とを、70年代から90年代にかけてのケベック社会の状況とともに描き出している。後に詳述するが、そのタイトルが示すように、この小説はロワの小説を意識して作られたと考えられる。ともに「幸福」のはかなさを嘆いた二つの作品は、困難な時代と状況に生きた人々を抑圧された女性の視点から描き、それぞれの時代のケベック社会をきわめて象徴的に映しとっている。従って、この二つの作品を比較分析するとき、ケベック社会の変貌が浮き彫りになってくるものと思われる。ここでは、それぞれの時代背景や世界の動きにも注目しながら、この二つの作品の分析を軸に、多元化するケベック社会の変貌について概観する。

I 『かりそめの幸福』と「独居」の街、モンリオール

ガブリエル・ロワは、生まれ故郷の西部を舞台に、雄大な自然のなかに生きる移民に共感に満ちたまなざしを注ぎ、他者との共生と連帯をモチーフに多くの作品を描いてきた。その一方で、処女作『かりそめの幸福』において、英仏の二言語がせめぎあう第二次世界大戦前のモンリオールの下町を描き、この都市を初めて世に知らしめた作家である。しかしそこに描かれた都市は、英語系と仏語系に二分され、それぞれが「二つの孤独」を生きる「独居」の街であった。

1940年代に書かれたジャーナリスト時代のルポルタージュにおいて、ロワは次のように述べている。

モンリオールの二元性はおそらく世界でも類を見ないものであろう。……何かと言えば、我々フランス系カナダ人は、我々イギリス系カナダ人は、ウエストマウントにウートルマン、東に西、英語系学校はカトリック系学校、死ぬときまで、そうした分断がつきまとう。コート・デ・ネージュ

とモン・ロワイヤル、二つの陣営のそれぞれの墓地が一つの山の両脇に広がっている。そこには同じさわやかな空気が漂い、同様の安らぎが満ちているというのに。柵によって厳然と、二つの陣営は分けられているのだ¹⁾。

『かりそめの幸福』は、モントリオールの中心に位置するモン・ロワイヤル山のふもとにあり、貧しい仏語系住民が集まる下町、サン・アンリを舞台に、当時はまだ第二級市民として抑圧された立場にあったその仏系住民の一家である、ラカス家の長女フロランティーヌの恋愛と挫折、結婚を軸に物語は展開する。当時の大部分の仏系の家族がそうであったように、ラカス家も7人の子供を抱える子沢山の貧しい一家で、成人したばかりのフロランティーヌが、飲んだくれで生活力のない父親に代わって、場末のカフェで女給として働きながら一家の生活を支えていた。フロランティーヌは、非現実的な夢にひたる傾向があり、自らの境遇をかちながら漫然と日々の生活に埋もれている。そんな彼女は、貧しい階級から這い上がろうとする野心に満ちた男、ジャンと恋に落ちる。ジャンは、フロランティーヌとは対照的に、冷徹に現実を見据える力があり、夢にひたるだけの向上心の乏しいフロランティーヌを見限ってしまう。小雪が舞うある日、つかの間の逢瀬のあと、モン・ロワイヤル山を眺める二人の心理を、巧みな風景描写もまじえ描写している次の場面は、極めて象徴的に二人の男女の隔たりを浮き彫りにしている。

彼らは、サン・アンリに面した、ノートルダム通りにかかる陸橋にさしかかった。ジャンはふと足を止めた。フロランティーヌは、彼が山の方に目を上げるのを見た。山の中腹に瞬く明かりは、輝き始めた空の星と見紛うばかりであった。

—— 君は、この山を眺めたことがあるかい？ ジャンはゆっくり訊ねた。

彼女は、戸惑いと皮肉がこもった笑みを見せたが、この奇妙な若い男が何を言わんとしているのか、ちっとも理解できないようであった。彼女の心はといえば、ついさっきのレストランでの幸せだったひとときに飛んでいた。そしてジャンと同じく、彼女もまた立ち止まり、夢見心地に欄干に寄り掛かり、山を眺めた。(……)

ジャンは、肩越しに彼女をしげしげと眺めた。(……) もはや彼女を抱き寄せようとも思わなかった。(……) そして彼女に自らの野心を語って聞かせ、二人の間にどれくらい大きな隔たりがあるかを示してやりたいと思った。(……)

—— 君はそんなこと、考えたこともないかもしれないが、僕は、これから駆け上がろうとする階段の、その一段目に足をかけようとしてるんだ。そして、サン・アンリとはもうすぐおさらばさ！²⁾

サン・アンリから見えるモン・ロワイヤル山の中腹には、英系の高級住宅街であるウエスト・マウント地区が広がっている。二人が眺めた山の中腹の瞬きとは、この手の届かない階層の人々が住む家々の明かりであった。このようにこの小説を通して、モントリオールを二分する象徴として描かれる山とともに、英系と仏系との分断、貧困と抑圧された状況にあえぐ仏系住民の姿が描かれる。

一方、この小説では、フロランティーヌの母親、ローズ＝アンナも大きくクローズアップされている。酒におぼれ、理想ばかりを追い求め、生活能力のない夫、ラザリウスのかたわらで、何人もの子供を抱え、貧しさと格闘しながら一家を支え続けるローズ＝アンナは、しばしば指摘されるように、自伝的な要素が色濃く反映され、ロワ自身の母親の姿と重なり合っていると言えよう。事実、『かりそめの幸福』は、ロワの母親であるメリナ・ロワに捧げられている。この小説はまさに、そうした苦難を生き抜いたフランス系一家の母親を描いた、フェミニズム小説とも呼びうるものなのである。ローズ＝アン

Mar. 2008

二つの「幸福」なる文学にみる多元社会ケベックの変貌

ナの苦しみも、モン・ロワイヤル山に象徴される分断された街の情景とともに浮き彫りになっていく。小説のハイライト、ラカス家を襲った悲劇である末息子のダニエルの病気と入院にまつわる場面で、モン・ロワイヤル山は次のように描かれる。

さっきからずっと、ローズ＝アンナは、モン・ロワイヤル山に向かって歩いていった。(……) モン・ロワイヤル山は、サン・アンリのふもとまで続く丘陵地であったが、ローズ＝アンナは、サンジョゼフ寺院と墓地ぐらいいしか知らなかった。その墓地には、下町に住む人間と高級住宅地に住む人間とがともに埋葬されるのだ。そして病気になって初めて、貧しい階層に生まれた子供たちも、この清しい空気が漂う高台にやってきて住むことができるのだ。下町の家々の周囲には、澱んだように工場の煙や煤が広がり、騒音に悩まされているというのに、ここにやって来るときようやくそれから解放されるのだ(……)³⁾。

幼い息子ダニエルは、急性白血病に襲われ、モン・ロワイヤル山にある小児病院に収容される。ローズ＝アンナが病院に向かう途中に眺めるモン・ロワイヤル山は、抑圧された仏系と裕福な英系との隔たりを印象づける場所であったが、同時に、死者が埋葬され、分断が無に帰す象徴的な場としても描かれ、アイロニーに満ちた静謐さが漂うのだった。

ダニエルは不治の病にとりつかれて、ようやく欲しかったおもちゃを手に入れる。それはブリキの笛であり、この小説の英訳のタイトル、*The Tin Flute* はこのエピソードを踏襲したものである。安っぽいブリキの笛であっても、ダニエルにとってつかの間の幸福をもたらしてくれたものであり、この小説を通して描かれる疎外された人々が追い求めたささやかな幸福の象徴でもあった。

一方、ダニエルは、病院でもう一つの素晴らしい何かを手に入れる。それは、英語しか話さない看護婦ジェニーとの友情であった。

… ジェニーは金髪のをきりと束ねて、深い青色の目元には、少し皺のある微笑みがたたえられていた。……(ローズ＝アンナはダニエルに尋ねた。)

—— 彼女は英語しかしゃべらないのかい？

—— そうだよ。ダニエルはそっけなく答えた。

(……)

—— だけど、彼女はおまへの言うことが理解できないだろう。

—— 理解できるよ。

ダニエルはちょっといらいらした様子で、部屋の奥にいるジェニーを目で追った。彼女は、彼の人生にもたらされた素晴らしく優しい何かだった。彼らは、たとえ同じ言語をしゃべらなくとも、十分に分かり合うことが出来るのだった⁴⁾。

結局、ダニエルは、周囲の献身的な看病も空しく天に召される。ダニエルの入院と死は、貧しく疎外された状況にあった仏系一家の悲劇の象徴であったが、病院で芽生えた言葉を越えた友情において、仏系と英系との分断は超えられない相克ではなく、融和への希望と可能性とが象徴的に描かれていると言えるだろう。

物語は、慌しく第二次世界大戦へと突入していく不穏な空気のもとで、貧しさから抜け出すことが出来ず、引越しを繰り返すラカス一家とローズ＝アンナの嘆き、そしてジャンに見限られながらも、思いを寄せてくれたエマニュエルに答えることでささやかな幸せをつかもうとするフロランティーヌ、その

エマニュエルとともに戦地へと出生するラカス家の父親ラザリウスなど、不穏な時代に翻弄されながら、「かりそめの幸福」を追い求める人々を克明に描いている。

Ⅱ 「独居」から「雑居」の街へ、トランスカルチュラリズムの進展

このようにロワが嘆き、ヒュージ・マクレランが「二つの孤独」⁵⁾と呼んだこの街の相貌は、その後の多民族化とともに「雑居」の街へと大きく変貌を遂げる。

まず1960年代に入り、いわゆる「静かな革命」と呼ばれる行政改革によって、ケベックは近代的な産業社会へと脱皮する。それまでの、生き残りを目指していた閉鎖的なナショナリズムから、フランス系文化の積極的な開花をめざすナショナリズムへと移行して、フランス系の人々は自らのアイデンティティを強く主張し始める。仏系のエリートも台頭し、フランス系住民はもはや抑圧された第二級市民の地位に甘んじてはいなかった。60年代から70年代にかけて、ケベックは、カナダからの分離独立も辞さないとの強いナショナリズムを掲げ、フランス系社会としてアイデンティティの確立に向けてレファレンダムを繰り返した。

80年代に入り、ケベック社会は再び大きな変革期を迎える。ケベックには、モントリオールを中心に多くの移民が入り込み、この街はすでに、ロワが描いた英系と仏系に分断された街の相貌から遠く隔たっていた。ケベックは、こうして徐々に進展していた多民族化に向き合うことを余儀なくされ、英系カナダが標榜するマルチカルチュラリズムとは異なった、独自の民族共存の形態を模索する。英語も仏語も母語としないアロフォンと呼ばれるマイノリティの側から発祥し、フランス系との連帯を核として発展していったトランスカルチュラリズムは、ケベックにおける多民族共存の在り方を象徴的に表していると言えよう。注目すべきこととして、この動きは、フランス語で活発な表現活動を展開し始めた移民作家たちによる、いわゆる「移動文学」(エクリチュール・ミグラント)と呼ばれる動向と表裏一体のものであり、それとともに発展していった⁶⁾。

1980年代以降のケベック社会と文学の動きにおいて注目されるトランスカルチュラリズムと移動文学(エクリチュール・ミグラント)と呼ばれる動向は、それまで強固なフランス系社会の確立を目指していたケベックが、急速に多元化していく過程を映し出すものであった。これらの動きの中で一貫して問いかけられていることは、どのようにして多様な人々と共存しコスモポリタンな社会を実現するかという現代社会に共通する普遍的なテーマであろう。

世界的な視野においても、モントリオールで進展するコスモポリタニズムは注目を浴びている。トランスカルチュラリズムの提唱者の一人であるフルビオ・カッチャは、現在パリに住んでいるが、2005年秋にカナダや欧州の仏語圏で流通する雑誌『リベルテ』の誌上で、「パリはモントリオール化するか?」というテーゼを掲げた特集を組んでいる。世界のメトロポリスであるパリと、どちらかといえば世界の周辺に位置する一都市にすぎないモントリオールをいきなり対比するのは無謀ではないか、そんな声も聞こえてきそうであるがと前置きしながら、カッチャはモントリオールに備わる「雑居の普遍性」とも呼ぶうるものが、今後、ますます重要性を帯びてくだろうと力説している⁷⁾。

実際、フランスでは昨年来、根強い差別感に基づくフランス社会への不満から、移民の第二世代を中心とする若年層の暴動が頻発し、社会の内部に広がっていた亀裂が一挙に表面化した感がある。もちろん移民問題といっても、植民地主義の歴史を引きずり、旧植民地である北アフリカ出身のアラブ系移民を大量に抱えるフランス社会の状況と、ケベックにおけるフランス語を求心力とする比較的多岐にわたる移民の状況とを簡単に比較することはできないであろう。しかしフランスの移民受け入れと統合の原則において、ライシテを掲げる共和国理念のもと、軸となる「平等主義」と「普遍主義」が大きな矛盾

Mar. 2008

二つの「幸福」なる文学にみる多元社会ケベックの変貌

を露呈して、明らかに立ち行かなくなっていることは多くの論者が指摘するところである。「いつさいの属性をカッコにくくり普遍的・抽象的個人として」⁸⁾ 移民を扱うことは、欺瞞に満ちた平等主義のもとに横行する差別の実態を隠蔽してしまうことに他ならない。それとは対照的に、ケベックでは移民の存在を顕在化させ、ときには軋轢や論争もいとわず、連帶的雑居と対話のなかに妥協点を見出そうとしていると言えるのではないだろうか。

一方、シャンゼリゼ通りにはマクドナルドやピザ・ハットなどファーストフードの店も軒を並べ、アメリカ化の影響も顕著である。フランスの著名な学者ピエール・ブルデューは、グローバル化が進むなか、多様性を抱え込み、アメリカ化の波にも洗われ、パリは近い将来カナダのような状況に直面していくであろうと予言したという⁹⁾。

このように考えてくるとき、確かにモントリオールはこれまで世界の周辺部に位置する一都市に過ぎなかったが、グローバル化の今日、この都市が経てきた経験は新しい意味を獲得しその重要性を増していると思われる。ケベックのユダヤ・アラブ系の作家ナyim・カタンは先に挙げた『リベルテ』の特集号で、「モントリオールには、多様性を困難としてではなく恵みとして受けとめ、そのなかに生きようとする意志と知恵が宿っている。」¹⁰⁾と述べている。

Ⅲ 移動文学と新しい世代の誕生

2007年、ケベックで四十年ぶりに編纂された本格的なケベック文学史 *Histoire de la littérature québécoise* (Boréal, 2007) が出版され、その中でもトランスカルチュラルイズムと移動文学はケベック文学に一時代を画したとして大きく取り上げられている。そしてこの動向は、ケベックにおける独自の状況を背景に、グローバル化がすすむ世界の動きも反映し、リオタールの唱えたポストモダニズムや、エドワード・サイードらによって広められたポストコロニアリズム、エドワール・グリッサンに代表されるクレオール主義、ホミ・K・バーバーらを中心とするカルチュラル・スタディーズなど、世界の思想的な潮流と深い係わりをもちながら生まれたものであると位置づけられている¹¹⁾。

一方、注目すべきことは、ケベックにおけるトランスカルチュラルイズムの浸透と移動文学の広まりは、新しい感性と考え方をもった新しいジェネレーションを生み出し、ケベック社会と文学に新しい局面を切り拓いていることである。とりわけ大きな要因は、移動文学が教科書のなかにも取り入れられ、教育を通してケベック社会のなかに制度的にもしっかりと組み入れられたことにより、若い世代に大きな影響を与えたと考えられることである。生粋のフランス系ケベックワであり、たとえ移民経験をもたずとも、「移住性」や「雑居性」をモチーフとした作品や、移民との共生による深い自己変容の経験を描いた作品など、近年、そうした新しい世代の息吹を感じさせるような文学が次々と生み出され注目をあびている。例えば、2005年に出版され大きな反響を呼んだ20代の作家ニコラ・デックナーによる『ニコルスキー』¹²⁾では、オリジンを問うこと自体の無効性をユーモラスで芸術的な筆致のなかに描き出している。また一方で、移民作家の作品において、移住の体験を普遍的な現実やケベックの現状に組み入れ、「ケベック性」とのかかわりと混淆のなかに積極的に位置づけようとする傾向が顕著になっている。こうした「移住性」と「ケベック性」との双方向的な交流による新たな状況を、ある批評家は「トランスミグランス」¹³⁾という興味深い言葉で表現しているが、「移動文学」がある意味で発展的に解消し、ある種の触媒作用を及ぼしてケベック社会と文学を変容させつつあることは紛れもない事実であると思われる¹⁴⁾。

Ⅳ アブラ・ファルード『すり抜けし幸福』とトランスミグランス

すでに述べたように、80年代から90年代前半において、ケベックにおいて独自の多民族共存の形が模索され、カナダのマルチカルチュラリズムとは異なった「トランスカルチュラリズム」という概念が主張され、広く浸透することとなる。それに付随して、フランス語による活発な表現活動を始めた移民たちによる「移動文学」は、単なる「移民文学」とは異なり、フランス系としてのアイデンティティを求めるナショナリスティックな動きのなかに、複数のアイデンティティと多様性の息吹を吹き込み、それまでの既存の枠組みを取り壊そうとした試みであったといえるだろう。その作品の大部分は、マイノリティ性を核としたケベック文学との共振をもとにしながらも、テーマや文体においてそれぞれの出自に遡り、故郷にもケベックにも当てはまらない、浮遊する新しいアイデンティティの在処を指し示そうとした。一方、90年代の後半から二十一世紀にかけて注目を浴びている「トランスミグランス」では、「移住性」や「移民性」を一つの核としながら、解体と浮遊の果てに、混交と融和による新たな地平を打建てようとする新しいコスモポリタニズムが目指されていると思われる。この「トランスミグランス」を考える上で、次に取り上げるアブラ・ファルードの小説は、文体において「移民性」と「ケベック性」との混交を象徴的に実現し、一つの興味深いモデルになりうると考えられる。

ガブリエル・ロワの『かりそめの幸福』(*Bonheur d'occasion*)が出版された約50年後、ケベックに移住したレバノン出身の女性作家によって、幸福をタイトルにした小説が発表される。アブラ・ファルードの『すり抜けし幸福』(原題は、*Le Bonheur à la queue glissante*)¹⁵⁾は、何人かの評者が指摘するように、『かりそめの幸福』と枠組みにおいて多くの共通点を持ちながら、約半世紀の間に大きく変貌したケベックの状況を浮き彫りにしているといえるだろう。

『すり抜けし幸福』は、75歳になる女主人公ドウニアのモノローグによって、レバノンからケベックへと移住した一家の運命を、とりわけ疎外された立場にあった移民女性の視点から描いている。ドウニアは、移住の地であるカナダで、その地の言語である英語もフランス語も十分に話すことができず、5人の子供を育てながら、ひたすら夫に従属して生きてきたアラブ系の女性である。ドウニアの二番目の娘ミリアムが、母親の体験を聞き取りながら小説を書こうと企画することから、ドウニアはこれまで経てきた経験を、封印してきた様々な思いとともに語り始める。

『かりそめの幸福』が、物語の一つの軸として、フランス系の子沢山の一家をたくましく支え続けた母親であるローズ＝アンナの姿を克明に描き、当時、疎外された状況にあって、とりわけ困難を背負わされた女性の運命を告発するフェミニズム文学であったように、『すり抜けし幸福』も、沈黙のなかにかき消されていた移民女性の声を拾い上げ、子沢山の一家の母親であるドウニアの苦難を浮き彫りにしたフェミニズム小説であるといえよう。

『すり抜けし幸福』は、ドウニアの巧みな語りによって、70年代から90年代にかけての、レバノンからの移民一家の変遷が描かれる。夫のサーラムのあとにつき従い、ドウニアは5人の子供を連れてレバノンからケベックへと移住する。モンリオールの郊外には夫の母親がすでに移住していた。しかし、母親と家族とは折り合いが悪く、一家は真夜中に母親の家を飛び出してしまう。一家は真夜中に行く当てもなく、部屋探しをするはめになる。かろうじて借家を見つけ、波乱の中での移住生活が始まる。サーラムは小さな雑貨屋を始め、身を粉にして働いて、ようやく店は軌道へと乗る。店の手伝いをしてくれたケベックワたちとの交流により、一家は次第にケベックでの生活に溶け込んでいく。

70年代半ば、一家はケベックから再び故郷のレバノンへと帰郷する。バイルートに戻ってみると、故郷の生活習慣や価値観はすっかり遠いものに思われる。ドウニアは自分では気がつかないうちに、アメ

Mar. 2008

二つの「幸福」なる文学にみる多元社会ケベックの変貌

リカナイズされた生活習慣が身に付いていることに愕然とする。同じ言葉を話す同邦人であっても、彼らに親しみを感ずることが出来ず、ドウニアはケベックでもベイルートでも、心から打ち解けて話ができる友達を見つけることは出来なかった。

やがてレバノンで内戦が勃発し、ドウニア一家は再びカナダへと舞い戻る。時代の流れに押し流され、一家は再び異郷の地で暮らし始める。子供たちはそれぞれに成長し、新しい世界に適合しながら家庭を築く。取り残されたのは、むしろ親であるサーラムとドウニアであった。しかし、夫であるサーラムと妻であるドウニアの孤独は全く別のものであった。厳しい移民の体験を経るなかで、一家はそれぞれの孤独を生きなければならなかった。

年老いて、夫であるサーラムは、アラビア語を解さない孫と母語で会話ができないことを嘆くのだった。しかしドウニアは、たとえ雄弁に話すことが出来なくとも、ほんの片言やジェスチャーであっても、物事の本質を伝え合うことはできると感じる。言葉しかコミュニケーションの道具を持たない男の脆弱さに対して、料理やしぐさで心を通い合わせることができる女のしなやかな強さが浮かび上がる。ドウニアは、レバノンのチーズより、今はもうカナダのチーズの方がお気に入りだと言う。若い頃、新天地カナダで精力的に新しい生活を切り拓いてきた夫は、年老いて、生まれ故郷のレバノンへの郷愁を募らせる。しかし、妻はもはやレバノンに帰りたいとは望まない。「子供たちと孫たちのいるところこそ私の故郷」¹⁶⁾「子供たちと孫のいるところで死にたい。」¹⁷⁾ドウニアはそう願う。年月のなかに、男の強さと弱さ、女の忍従としたたかさが浮き彫りになる。

しかしこの小説では、そうした移民体験だけが語られるのではない。ドウニアの巧みな語りのなかで問いかけられるのは、むしろすべての人間にとって本質的で普遍的なテーマである。老いとは何であるのか。夫婦とは。また、親子の絆とは一体何であるのか？「子供にしがみつくのは、愛というより、死の恐怖からではないのか」¹⁸⁾ドウニアは自問する。そして、老いて子や孫の重荷となることをひたすら恐れるのだった。彼女が望むのは、誰にも迷惑をかけずに清々として老い、達観した人生を送ることであった。こうして、言葉を持たなかった移民女性は、人生の晩年にふとしたきっかけから、押し殺されていた内面の声を出し始める。

私はずっと待ちつづけた。そして、ようやく今、声を上げようとしている。(……)私は心の痛みを、ちょうどズッキーニを壺のなかにつけるように、ずっと心の奥にしまい込んできた¹⁹⁾。

特徴的であるのは、ドウニアの思索は、しばしばアラブの諺によりながら進められている点である。そして諺の数々は、この小説を貫く文体の重要なアクセントとなっている。ドウニアが引用するアラブの知恵は、人生の様々な側面を照らし出し、論し導く。初めは誰しも、貧しい者が金持ちを必要とすると思うだろう。しかしそれは逆なのだ。「与えるものより、与えられるものの方が大きな心が必要とする。(……)ネズミがライオンを必要とするように、ライオンもネズミの小さな牙を必要とする。(……)砂利によって大きな壺は支えられている。(……)あらゆるものは結びつき、生きとし生けるものは、それぞれに大切な役割をもつ。」²⁰⁾ドウニアはまた、自らに言い聞かせる。「子供が歩くことを学ぶように、老人は死ぬることを学ぶ。」²¹⁾「生まれ出たものは畏にからめとられ、死すものは安らぎを得る。」²²⁾

小説のクライマックスで、ドウニアの封印されてきた過去、隠されてきた真実が明らかになる。信頼して付き従ってきたはずの夫から、妻は数々の理不尽な仕打ちを受けていた。何人もの小さな子供を抱え、妊娠していた妻を残し、夫は遠方に出向こうとした。行かないでくれと懇願し夫にすがりつこうとしたとき、夫は妻を激しく罵倒した。尊敬していたはずの父親も夫の側に立ち、娘を冷たく見放した。忍従を受け入れ生きてこざるを得なかった、アラブ女性の悲しい運命が浮かび上がる。そんな理不尽さ

に声一つ上げられずに、ごまかしとあきらめの人生を送ってきた自らをまたドゥニアは責めつづけてきた。そしてとうとう、真実を糾弾し、押し殺してきた情念を噴出させる。誰が一番悪いというのか？

しかしドゥニアの最も痛切な隠された苦しみとは、何よりも、長男であるアブダラの病であった。アブダラは、最も感じやすい思春期に移民体験という大きな変節を一身に受け、二つの異なった土地のはざままで適応障害を起こし、深刻な心の病に陥っていた。長男として家族を支え、これまでの一家の道のに大きく貢献してきながら、アブダラはその一家の犠牲になったのだ。不安定な情操を抱え周囲と激しくぶつかり、精神病というレッテルを貼られた長男の不憫を、ドゥニアは心の底から嘆き悲しむ。アラブの諺が言うように、「何度も移植された木々は、実りが少ない」²³⁾のだ。こうして、長男の病とドゥニアの苦しみは移住体験の過酷さを浮き彫りにする。

夫のサーラムも死去し、ドゥニアは一人、養老院で静かな晩年を迎えている。時の流れと夫の死が、確執のすべてを運び去ってしまったかのように、穏やかな時間が流れる。夢のなかでお茶を飲みながら、ドゥニアは夫と会話する。夢のなかで、夫は妻を静かにいたわりながら、長男アブダラの苦しみはこの世の約束であったのだと言い聞かせる。人生の終焉に迎えた孤独のさなかで、ドゥニアは夫と和解し、息子に降りかかった災難と自らの苦しみを静かに受け入れる。

『すり抜けし幸福』は、1998年に発表されたのち、ケベック・フランス大賞を始めとし、数々の賞を受賞する。この小説で描かれた移民したアラブ女性の体験は、ケベックの現実の一つとして広く受け入れられたといえるだろう。すでに述べたように、この小説が、ケベック文学において一時代を画した『かりそめの幸福』のタイトルと物語の枠組みを踏襲していることは、極めて示唆的であると思われる。両者の物語の内容は大きく違っていても、この文体を引き継いだなかでの、ある種のパリンプセッサ（上書き化）のなかに、移民作家が自らの現実を、ケベックの現実として組み入れようとする意図がはっきりと浮かび上がってくる。『かりそめの幸福』ほどではないにしろ、読者や文壇の受容においても一定の成功を得て、この小説は、ケベックにおけるいわゆる「トランスミグランス」の動向を象徴的に表しているといえるだろう。

V ケベック社会の変容と新たなコスモポリタニズムの構築

2007年は、フランス語憲章と呼ばれる101号法が施行されて30周年にあたり、この法律がケベック社会にもたらした影響が様々な方面から検証されている。この法律は当初は、フランス語の純化をめざし構成員のフランス語への同化を強いるラシト的な法律だとの批判を浴びたが、今日、この法律がもたらしたのはむしろフランス語の雑種化であり、社会の多元化であったことが明らかになりつつある。フランス語はマイノリティの結束を表すシンボリックな言語として機能し、多民族化し多元化する社会のダイナミックな変容を支えている。これらの検証のなかでもとりわけ注目されることは、「101号法の落とし子たち」と呼ばれる世代が育っていることである²⁴⁾。これは先に見た「移動文学」の浸透によって現れた文学世代とも密接に関連していると思われる。101号法が施行され、様々な出自の子供たちとともに学び育った世代は、それまでの世代とは明らかに異なった感性と考え方を備えている。政治的なスタンスにおいても、いわゆるケベック・ナショナリスト、あるいはケベックの主権を要求する尊厳派に属する考え方は影をひそめ、フランス語を軸とした社会を維持しながらも、多様な人々との共存を受け入れるコスモポリタンな考え方が広がっている。ただしこれは、ケベックとはいっても、とりわけモントリオールにおいて顕著な状況であることは留意しておく必要がある²⁵⁾。

Mar. 2008

二つの「幸福」なる文学にみる多元社会ケベックの変貌

ロワが描いたように、英系と仏系に分断され、それぞれが「二つの孤独」を生きざるを得なかったモンリオールは、幾多の変遷を経て、新しいコスモポリタニズムを模索する「雑居」の街へと大きく変貌した。今日では、ファルードの小説における「トランスミグランス」が示すように、英系と仏系だけでなく、移住してきた様々な移民の現実がケベックの状況と深く交じり合い、新しいケベック社会の現実として受け入れられ、認識されているといえるだろう。

このようなケベック社会の歩みは、一地域の事情にとどまるのではなく、グローバル化が進む今日、普遍性に訴える様々な問いを内包していると思われる。ガブリエル・ロワの小説から、アブラ・ファルードの作品に見るパリンプセッサ（上書き的）な変遷は、約半世紀の間に目覚しく変貌を遂げた多元社会ケベックの歩みを雄弁に物語る一つの証左であろう。

注

- 1) *Bulletin des agriculteurs*, Roy, Gabrielle « Après trois cents ans », septembre 1941, p.39.

ウエストマウントは英語系の富裕層が住む地区で、ウートルマンはフランス語系の多く住む地区として知られている。

- 2) Roy, Gabrielle, *Bonheur d'occasion*, Stanke, 1977, pp.84-85.

『かりそめの幸福』のすべての引用、参照はこの版から行い、翻訳は筆者による。

- 3) *Ibid.*, pp.218-220.

- 4) *Ibid.*, p.226.

- 5) MacLennan, Hugh, *Deux Solitudes*, Bibliothèque Québécoise. 1994.

- 6) この80年代以降のケベック文学の動きについては、拙著『トランスカルチュラルizmと移動文学—多元社会ケベックの移民と文学—』彩流社、2006年、において詳しく述べた。

- 7) フリュビオ・カッチャ氏は、今はケベックを離れパリに住んでいるが、2006年3月、幸運にもパリで出会いインタビューを行うことが出来た。パリに移住してもう十年以上にもなるが、今も変わらないというモンリオールへの熱い思いを語ってくれた。

Liberté, « Paris se Montréalise-t-il ? » Présentation, Fulvio Caccia, novembre 2005, p.3-9.

- 8) 例えば、社会学者の宮島喬氏はその著書のなかで、フランスの社会統合政策が現在危機に瀕していると指摘している。「[フランス的統合とは何か]」が問われるようになったが、(……) [ヴィジブル・マイノリティ] の時代に、フランス的平等の理念は、成員の属性上の差異をどのように扱うのだろうか。いっさいの属性をカッコにくくり普遍的・抽象的個人として扱うとは、ヴィジブル・マイノリティにとってはいったい何を意味するか。それは、彼らが肌の色や、宗教や、日常生活を理由に差別されているという動かしがたい事実を素通りし、無視することではないのか。(……) もっと現実的に即した「平等」の捉え直しが必要となる。(……)」宮島喬『移民社会フランスの危機』岩波書店、2006年、前書き12-13ページ。

- 9) *Liberté*, « Paris se Montréalise-t-il ? » novembre 2005, p.7.

- 10) *Ibid.*, p.27.

- 11) Biron, Michel et d'autres, *Histoire de la littérature québécoise*, Boréal, 2007. p.561-572.

- 12) Dickner, Nicolas, *Nikolski*, Québec, Éditions Alto, 2005.

- 13) Dupuis, Gilles, « Les écritures transmigrantes. Les exemples d'Abla Farhoud et de Guy Parent », Chartier, Daniel et d'autres, *Littérature, Immigration et Imaginaire au Québec et en Amérique du Nord*, L'Harmattan, p.259-273.

- 14) ケベック文学の研究者であるダニエル・シャルテエも2007年3月にモンリオールで筆者がインタビューした際、そのような見解を示していた。

- 15) Abla Farhoud, *Le Bonheur à la queue glissante*, TYPO, 2004.

『すり抜けし幸福』のすべての引用と参照はこの版からで、翻訳は筆者による。

16) Abia Farhoud, *Ibid.*, p.22.

17) *Ibid.*, p.22.

18) *Ibid.*, p.33-34.

19) *Ibid.*, p.133.

20) *Ibid.*, pp.103-104.

21) *Ibid.*, p.61.

22) *Ibid.*, p.120.

23) *Ibid.*, p.135.

24) 例えば、ケベックで広く流通しているフランス語系の雑誌 *L'actualité*, 15 septembre 2007, において、101号法施行後30年を迎えたケベックの状況についての決算が特集されている。そこで、ケベックでフランス語が統合の言語として広く受け入れられている現状が分析されている。“Vivre en français en Amérique, Yes sir!”

25) ここで述べてきた多民族化とコスモポリタニズムの進展は、主にケベック州の人口の約半数（350万人）を抱えるモントリオールでの現象であるが、しばしば指摘されるように、モントリオール以外のケベックの地域では、いまだにフランス系住民が80%以上を占め、都市部と地方との間には大きなギャップがある。近年、この地政学的な差異が際立ち始め、様々な論議を呼んでいる。

〔付 記〕

この論考は、平成17-19年度科学研究費補助金（基盤研究 C 課題番号17520213）を受けての研究成果の一部である。

(2007年11月16日受付)